

B 156 服飾絵画にみる服飾形態の比例について
大妻女大家政 ○高山京子 吉岡徹

目的：形態美については古来、感性が主とされ、科学や数理の世界との繋がりも希薄であるが、黄金比や丁矩形については古代エジプト、ギリシア以来多くの芸術に應用されると共に研究考察もなされている。しかし、それら比例におけるの算出方法は秘伝として、個人的に伝承とされ、その方法も研究者によって異なり、統一された定義も明確に示されていない。道形上、服飾の形態の変化を美的推移の点からみて、考察することは興味あることであるが、それらに関する研究、分析については皆無である。今回、17世紀以降に理想的服飾像とされた膨大衣装の形態における比例について考察し、比較検討を試みた。

方法：1600～1900年代の服飾絵画334点を主として10年単位で黄金比と丁矩形・正方形を基本形に二次元的に数値を分析して、時代・政治・風俗との関係を考察した。

結果：頭身については1800年代初期までは、頭身比もバラツキがみられたが、1830年頃から8頭身が一定した数値として示され、比較対象として算出した浮世絵と近似した数値が得られた。スカート比は丁矩形（縦位置）の形が多く、その比においては時代とのかかわりは弱く、数値は1860年が大、1610、1660、1710、1780年が小となり、ヤング（A. B. Young）の35年周期と一致する部分が示された。顔点上下比については、上部固有比としては√2が多く見られるが、18世紀を除いてその比の数値は小さい。対比大は1730、1770年で、1800年以降は対比がバラついた。これは頭飾りに対する多様性が時代と共に生じたものと思われる。以上の結果、服飾の変化に比例が美的表現としてのかかわりが強いことと思われた。